

Arvanitika の前置詞を伴う動詞の構造について

—北東アッティカ・ボイオティア地方における アルバニア語方言と標準語の比較—

井浦 伊知郎

1. 序

1.1. 北東ボイオティア方言

ギリシア南部、特に中部ギリシアからペロポネソスに及ぶ北東ボイオティア地域には、12世紀から14世紀に南下、移住したアルバニア系住民が生活している¹⁾。彼らは *arvanita* (複数形) と自称し、自らの言語を *arvanite* (女性複数形) と呼ぶ²⁾。ギリシア語でもそれぞれ *αρβανίτες* (複数形)、*αρβανίτικα* (中性複数形) と呼ばれる。この地域のアルバニア語方言は、ドイツ語圏の研究者を中心に *Arvanitika* (中性名詞。das Arvanitische とも) と総称され、アルバニア語の重要な方言の一つとして語彙収集等が進められている。

Arvanitika の特徴として、アルバニア本国の標準語から既に消失している古形の保持、また一方で日常語彙におけるギリシア語の浸透、等が主なものとして知られている。本論文で扱うのは、動詞をめぐる構造である。

1.2. *Arvanitika* における動詞の特徴。本論文の目的

標準アルバニア語は、弱形人称代名詞と緊密な動詞句構造を作る。これらの内、間接目的語と直接目的語の弱形³⁾が組み合わせられ、しばしば融合形で動詞の直前に置かれるのだが、これには制限がある。第一に、こうした融合形の組み合わせは、直接目的語が3人称である場合にのみ可能である。

(1) *ma* *đána* 「私にそれを与えた」 (*alb.ma dhanë*)
sg.1.dat.+sg.3.acc. give-aor.pl.3

これに対し直接目的語が1人称ないし2人称である場合は、それらのみが弱形として動詞の前に置かれる。間接目的語は独立して強形をとり、決して弱形

をとらない。この特徴は Arvanitika でも同様である。

ただ、Sasse(1991)によれば、Arvanitika では前置詞 *ndá* (*ndé*)⁴⁾ に対格強形を伴った目的語句が動詞に後置される (Sasse 1991: 322-323)。

- (2) *mə jép ndé tí* 「私を君に渡す」
sg.1.acc. give-sg.3 to sg.2.acc.
- (3) *u tərgój ndé múa* 「諸君を私(のところで)に送った」
pl.2.acc. send-aor.sg.3 to sg.1.acc. (alb.ju dərɡoi pər mua)

例文(3)は標準語でも前置詞 *pər* を用いて近い構文を作り得る(カッコ内に示した)が、例(2)は Arvanitika に独特のもので、同じ様な構文を標準語では作れない。

ここでは、間接目的語としての与格がむしろ前置詞句に置き替えられ易くなっている様に見える。また代名詞だけでなく、普通名詞(句)でも対格に前置詞 *ndá* (*ndé*)を伴って目的語句(特に間接目的語としての)を作る可能性がある。

そこで本論文では、こうした前置詞句を目的語とする動詞の構造が実際にどれくらい分布しているかを調べ、標準アルバニア語との比較、現代ギリシア語との対照を行う。なお例文は、主として Sasse(1991)のモノグラフ後半に収録されたテキスト類から引用する。

2. 前置詞句を伴う動詞

最初に、Arvanitika でどのような動詞が前置詞句を伴うのか、Sasse(1991)の分類に沿って概観しておこう。ここでは比較の為、与格⁵⁾を義務的に伴う動詞の例も併せて示す。

2.1. 間接目的語のみをとる動詞 (Sasse 1991: 339-340)

2.1.1. 常に与格目的語を伴う動詞

(Aは動詞前方の弱形人称代名詞)

- i arráŋ* 「Aに届く」
i bíc (*oryanojt*) 「A(特に楽器類)を演奏する」
i fías 「Aと話す」
i ndíh (*əŋ*) 「Aを助ける」
i fərbáŋ 「Aに仕える、勤める」
i θərrés 「Aを呼ぶ」

2.1.2. 常に前置詞句を伴う動詞

- cásem ndó /ndé NP 「NP に近づく」⁶⁾
jéndem ndó /ndé NP 「NP にいる、ある」
kám sevda ndó /ndé NP 「NP に好意を持つ、NP を愛する」
rúhem nga NP 「NP から隠れる」
fkaÁkón nga NP 「NP から隠れる」
trómbəm nga NP 「NP を恐れる」
véte ndó /ndé NP 「NP に行く」

2.2. 間接目的語と直接目的語をとる動詞(Sasse 1991: 340-341)

2.2.1. いわゆる「二重対格 (doppelte Akk.)」をとる動詞 (標準語では稀)

- e cerás NP 「A に NP を注ぐ」
e mbəsón NP 「A に NP を教える」
e mbłón NP 「A に NP を満たす」
e ngarkón NP 「A に NP を負わせる」
e píen NP 「A に NP を尋ねる」

2.2.2. 常に与格目的語を含む動詞

(ia は与格弱形 i と対格弱形 e の融合形、e は名詞 NP と文法的に一致する重叙代名詞)

- ia apandrís(əŋ) NP 「A に NP を回答する」
ia fáÁem NP 「A に NP を望む」
ia fərtón NP 「A に NP を示す」
ia húan NP 「A に NP を貸す」
ia jáp NP 「A に NP を与える」
ia profér(əŋ) NP 「A に NP を申し出る」
ia sistís(əŋ) NP 「A に NP を紹介する、勧める」
ia fés NP 「A に NP を売る」
ia Óóm NP 「A に NP を言う」

2.2.3. 前置詞句を目的語とする動詞

- e cál(əŋ) ndó /ndé NP 「A を NP へ持ってくる」
e cás(əŋ) ndó /ndé NP 「A を NP へ近付ける」

- e çéð (əŋ) nds /ndé NP 「AをNPへ投げる」
 e ftie nds /ndé NP 「AをNPへ放る、差し込む、注ぐ」
 e vs nds /ndé NP 「AをNPへ置く、据える」
 e varvijn nds /ndé NP 「AをNPへ投げ捨てる」

2.2.1.の例を除いて、ほぼすべての例は標準語でも同じ様に表現することができる。

一見すると、2.1.2.や2.2.3.で列挙された動詞と前置詞句は「行く」「持つてくる」「置く」等、ほぼすべて空間的な移動とその到達地点（または起点）という関係を示している。「好意」や「恐れ」といった感情の場合もこれと同様で、前置詞句によって感情の向かう相手（またはその原因となる存在）を示している。

その点からすると、1.2.で問題にした「与える」の例は、利益の対象に対する行為であり、単なる空間移動を主とする上述の例とは異なっている。

3. 前置詞句を目的語とする例

では、具体的な例を見てみよう。ここでは Sasse(1991)他のテキストから、前置詞句が動詞の目的語として用いられていることが比較的はっきりしている例を挙げ、現代ギリシア語の例とも対照する。

3.1. 間接目的語として機能する例

3.1.1. 「言う」

「～に（何かを）言う」意味の $\theta\acute{o}m$ は通常与格をとる(Haebler 1965: 106)。この場合、動詞は常に与格弱形の重叙を伴う。なお、 $f\acute{\lambda}\acute{\alpha}s$ 「話す」についても同様のことが言える。

(4) i $\theta\acute{o}t\alpha$ $dj\acute{\alpha}lit$. 「彼／彼女は男の子に言う」

dat. say-sg.3 boy-dat.

(5) i $f\acute{o}li$ $p\acute{\lambda}\acute{\alpha}k\acute{\alpha}s\alpha$. 「彼／彼女は老女に話しかけた」

dat. speak-sg.3 boy-dat.

しかし、Arvanitika では与格の代わりに前置詞句をとる場合がある⁷⁾。

(6) $\theta\acute{\alpha}$ $n\acute{o}$ $p\acute{\lambda}\acute{\alpha}k\acute{\alpha}$ $nd\acute{e}$ $dj\acute{\alpha}li$. (Sasse 1991: 484)

say-aor.sg.3 one old lady-nom. to boy

「老女が男の子に言った」

(7) *θότα ndé e mótra.* (Haebler 1965: 107)

say-sg.3 to his/her sister

「彼／彼女は姉に言う」

与格形から前置詞句への書き替え⁸⁾は古い形式とされる (Sasse 1991: 316-318)。

(8) *i θά sóməsə.* 「彼／彼女は自分の母に言った」

dat. say-aor.sg.3 his/her mother-dat.

θα ndé e jéma.

say-aor.sg.3 to his/her mother-acc.

(9) *i θά djálit.* 「彼／彼女は少年に言った」

dat. say-aor.sg.3 boy-dat.

θα ndé djála.

say-aor.sg.3 to boy-acc.

こうした動詞と前置詞句の構造は、現代ギリシア語では普通に見ることができ

(10) η επιβάτισσα είπε στον καμαρότο ... 「乗客はボーイに言った…」

属格を間接目的語として用いることもできる。

(11) *είπε του πατέρα του* 「彼は父に言った」

(12) *είπε στον πατέρα του* = (11)

3.1.2. 「与える」

動詞 *jáp* 「与える」の対象となる人物も通常与格形である (Haebler 1965: 106)。

(13) *ja θána péndəna.*

dat.+acc. give-aor.pl.3 pen-acc.

「彼らは彼にペンを渡した」

この動詞にも、前置詞句をとる例がある (Sasse 1991: 444)。

(14) *jápe ndonjé ndé akətfála jinfjejí tʃə s kéj.*

give-sg.2 something to somewhere relative who.not have-pl.3

「君はあるものを、何も持たないどこかの親戚に与える」

同じ用例は、南部アルバニア方言（トスク方言）を記述した文献中にも見られる(Hahn 1854: 167)。

(15) E dhánë ndë gra të týre.

acc. give-aor.pl.3 to wife-pl. their

「それを彼らはその妻たちに与えた」

間接目的語を前置詞句で表わすこうした用例は、Arvanitika のテキスト全体から見ればごくわずかだが、現代ギリシア語では珍しくない (Holton/ Mackridge/ Philippaki- Warburton 1997: 192, 195) ⁹⁾。

(16) Το έδωσα στον Αντώνη. 「私はそれをアンドニスにあげた」

(17) Έδωσε το βραχιόλι στην Μαίρη. 「彼はその腕輪をマリアにあげた」

(18) Δώσανε στο Νίκο ένα συμβόλαιο. 「彼らはニコスに契約書を渡した」

3.1.1.の場合と同様に、属格を間接目的語として用いることもできる。ただし、重叙属格代名詞と前置詞句の共起はない。

(19) Του δώσανε του Νίκου ένα συμβόλαιο. = (18)

(20) *Του δώσανε στον Νίκο ένα συμβόλαιο.

間接目的語が人称代名詞であっても、前置詞句にすることはできる。ただしこの場合は、対比の意味が伴う (Holton/ Mackridge/ Philippaki-Warburton 1997: 371, 401-404) 。

(21) Το έδωσε σ' εμένα. 「君はそれを（他の人ではなく）私にくれた」

(22) Σου δίνω. 「私はおまえに与える」

3.1.3. その他

前節であげた他に、前置詞句を間接目的語にしていると思われる例がある (Sasse 1991: 532)。

(23) múar tiléfono ndé María.

take-aor.sg.3 telephon-acc.to Maria

「（彼女は）マリアに電話した」

これも、現代ギリシア語の場合と非常によく似ている。

(24) Μιλώ στη Μαρία στο τηλέφωνο.

(25) Τηλεφωνώ στη Μαρία.

標準アルバニア語で同じ動詞を用いて書き替えれば(26)のようになる。しかしこれを(27)の様に *në*+人物で置き替えることは難しい。人物をとる前置詞として可能なのは *me* 「～と共に」 だけである。

(26) E mori në telefon. 「彼女に電話した」

acc. take-aor.sg.1

(27) ?Mori telefon në të. 「彼女に電話した」

to her

(28) Foli me të në telefon. 「彼女と電話で話した」

speak-aor.sg.3 with her on telephon

また、次の様な例もある(Sasse 1991: 480)。

(29) bëri karta nd isanjë lí eđé mē tērgój ós engjímatí.

make-aor.sg.3 card to prosecutor and me send-aor.sg.3 as criminal

「彼は手紙を検事に出し、そして私を罪人として送検した」

ただこれについては、*karta nd isanjë lí*を「検事宛の手紙」とひとまとめにすることも可能であり、曖昧さが残る。

3.2. 直接目的語として機能する例

これにあたる例はまったく見つかっていない。ややそれに似たものとして、標準語で次の様な例が示されている (Buchholz/ Fiedler 1987: 490) 。

(30) Ai shpifi për mua. 「彼は私を中傷した」

he embroider the truth-aor.sg.3 for me (lit. 『彼は私に関して真実を歪めた』)

しかし、これは *shpifi* が本来「真実に尾ひれを付ける」という意味の自動詞として用いられるという点を考えると、見かけ上、目的語成分の様に振る舞っているに過ぎないだろう。

4. 考察

3. であげた前置詞句の例は、標準アルバニア語においてはほとんど見られないものであり、本来ならばすべて与格に取って代わられるべきものである。

もちろん、Arvanitika のテキストにおいてもこうした用例はごく少数派であって、ほとんどの場合は標準アルバニア語と同様、与格形が用いられる傾向にある。だがわずかでもこうした構造が一定の数だけ存在し、しかもそれが現代ギリシア語の前置詞句による間接目的語句の用法としばしば類似している点は、ギリシア語圏内のアルバニア語における言語変化の推移という観点からも、注目に価する。

また、こうした例のほとんど全部が、標準語にもはや存在しない前置詞 *ndá* (*ndé*)を用いて作られている。ちなみに標準語では、この前置詞から *-d* が脱落して *në* となるが、その用法は必ずしも *ndá* (*ndé*)のそれに一致しない。特に、前節で示された様な用法はまったく認められない (Buchholz/ Fiedler 1987: 378ff., Akademia 1995: 391)。このことから、Arvanitika における古形保持の傾向が見取れる。

更に、これらの意味的背景を考えてみる時、目的語としての前置詞句は必ず文末、または少なくとも動詞の後方に置かれており、動詞の前方に来ることはない。しかも例(14)における「何も持たないどこかの親戚」の様に、関係節を含む複雑な構造が目的語句になっている例もある。談話の観点からより後方へ位置すべき場合 (例えば、間接目的語句の内容が新情報やレーマとして用いられる場合等)、動詞と緊密に結びつく与格よりも、むしろ前置詞句の形で動詞から遠く切り離していく、ということも考えられる。多少複雑であっても与格 (とそれに対応する弱形与格代名詞) で動詞句を構成する標準語とは異なり、Arvanitika の統語法がよりゆるやかな傾向¹⁰⁾を持っている可能性もある。ただ、そうしたゆるやかさがあるとして、それが古いアルバニア語に本来見られたものであるか否かは、別途検討する必要があるだろう。

註

1) Sasse(1991)に従って北東ポイオティア方言の地域を具体的に挙げると、アルバニア人居住地域として最大のものは Επαρχία Αττικής の北東部、すなわち南エウポイア湾の後方に位置し Πάρνηθα, Πέντελη 両山脈間に点在する 20 余の村、例えばマルコプロ Μαρκόπουλον (通称 Μαρκόπουλο)、アヴロン Αυλών (通称 Κακοσαλέσι Κακοσάλεσι)、カバンドリティ Καπανδρίτιον (通称 Καπανδρίτι)、アカルナイ Αχαρναί (通称 Μενίτζι Μενίδι) 等から成る地域である (Sasse 1991: 13-20)。アルバニアと国境を接するチャメリア地方の方言 (çamërishtja) を合わ

せれば、ギリシア全土でアルバニア系住民は数万人程度いると考えられる (Sasse 1991: 3-5, Gjinar 1989: 57-56)。ただし、この話者の全てが日常的にアルバニア語を用いているとは言えない。

2) 地域や年代によっては、南イタリアへ移住したアルバニア人の名 *arbrëf* に由来する古称 *arbrëfjt* も用いられる。

3) Arvanitika における人称代名詞の数・格変化は次の通り (Sasse 1991: 139-140)。

	sg.1	sg.2	sg.3	
nom.	ú	tí	áj(m.)	ájó (f.)
acc.	múa/mə	tí/tə	atə/e	
dat.		atíja (m.) asája (f.)/i		

	pl.1	pl.2	pl.3	
nom.	ná	jú	áta (m.)	áto (f.)
acc.	néve/na	júve/u	áta (m.)	áto (f.)/i
dat.		atíre/u		

[強形／弱形]

4) この前置詞は、スラヴ系の前置詞 *do* と語源上深い関係があると考えられる (Demiraj 1985: 630-631, Demiraj 1993: 227, Meyer 1891: 299)、19世紀に入ってからもしばらくの間は *nde* の形で、アルバニアの南北を問わず様々な文献に見られる (Mann 1948: 307)。

5) Sasse や Haebler は、Arvanitika の与格が属格や奪格と全く同形であることから「周辺格 (Marginal)」という一括した名称を用いている。従って Arvanitika の格は「主格」「対格」「周辺格」の三つになる。ただこれは日本語で余り馴染みがないし、また本論文では問題が与格としての用法に限られているので、特に必要のない限り「与格」とする。

6) *casem* は標準語 *qasem* の場合、前置詞句の代わりに与格を用いることもできる。

i qasem shtëpisë 「私は家に近付く」

dat. go up close-sg.1 house-dat.

7) *óom* は「～に名付ける」の意味で用いられる場合、常に与格を間接目的語とする (Sasse 1991: 343, 348)。今回調べた文献でも、前置詞句を用いた例はない。

djáĭt ia óojnə ján.

boy-sg.dat. dat.+acc. name-aor.pl.3 Jannis

「(人々は) その子をヤニスと名付けた」

ia θójnə émbərinə θanás.

dat.+acc. name-aor.pl.3 name-acc. Thanasis

「(人々は) 彼にサナシスと名を付けた」 (émbərinəは省略可)

8) こうした顕著な例は標準語ではごくわずかである (Buchholz/ Fiedler 1987: 227)。

do t'i kontribuojnë zhvillimit të gjuhës.

will dat. contribute-pl.3 development of language-dat.

=do të kontribuojnë në zhvillimin e gjuhës.

into development of language-acc.

「(それらは) 言語の発展に貢献するだろう」

9) もちろんこの構造は名詞句のみでも変わらない (Mackridge 1985: 206)。

ένα κληροδότημα στην εκκλησία 「教会への遺贈」

10) これに関し、Arvanitika では目的語が文のテーマとして文頭に現れた場合、対格や与格の語尾が消失し、主格の形で表現されることが指摘されている(Sasse 1991: 426)。

kótfə e páfə djérma ndá kafənió.

Kostas-acc. acc. see-aor.sg.1 yesterday in coffee shop

または

kótfə e páfə djérma ndá kafənió. 「コストスなら、私が昨日カフェで見た」

Kostas-nom.

maríə sə i ðáfə tsá ðrahmé.

Maria-dat. dat. give-aor.sg.1 some Dhrachme-pl.

または

maría i ðáfə tsá ðrahmé. 「マリアなら、私が数ドラクマあげた」

Maria-nom.

ただし、純然たる前置詞句では許容されない。

nd aθíñə s bíə jí fáre. 「アテネは雨がまったく降らない」

in Athens not fall-sg.3 rain-nom at all

* aθína s bîe fî fáre.

Athens-nom.

参考文献

- Akademia e shkencave e RSH (1995). *Gramatika e gjuhës shqipe*, I. Tiranë.
- Buchholz, Oda/ Fiedler, Wilfried (1987). *Albanische Grammatik*. Leipzig: Verlag Enzyklopädie.
- Çabej, Eqrem (1982). *Studime etimologjike në fushë të shqipes*, I. Tiranë.
- Cirincione, Angela (1968). *Sintassi albanese degli antichi scrittori*. Roma.
- Demiraj, Shaban (1985). *Gramatikë historike e gjuhës shqipe*. Tiranë: 8 Nëntori.
- Demiraj, Shaban (1993). *Historische Grammatik der albanischen Sprache*. Wien: Österreichische Akademie der Wissenschaften.
- Domi, Mahir (1995, 1997). *Gramatika e gjuhës shqipe*, 1+2 . Tiranë.
- Gjinari, Jorgji (1989). *Dialektet e gjuhës shqipe*. Tiranë.
- Haebler, Claus (1965). *Grammatik der albanischen Mundart von Salamis*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Hahn, Johann Georg von (1854, rpt. 1981). *Albanesische Studien*, Heft II. Athen: Dion Karavias.
- Holton, David/ Mackridge, Peter/ Philippaki-Warburton, Irene (1997). *Greek. A Comprehensive grammar of the modern language*. London/ NY: Routledge.
- Jochalas, Titos P.(1977). Gli studi albanologici in Grecia. *Akten der internationalen albanologischen Kolloquiums* (Innsbrucker Beiträge zur Kulturwissenschaft Sonderheft 41), 85-95.
- Jochalas, Titos P. (1983). Die Balkanlinguistik in Griechenland. *Ziele und Wege der Balkanlinguistik*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 104-114.
- Mackridge, Peter (1985). *The Modern Greek Language*. Oxford: Oxford Univ.Press.
- Mann, Stuart E. (1948). *An historical Albanian-English Dictionary*. London: The British Council.
- Matsumura, K. & Hayashi,T. (1997). *Dative and related phenomena*. 東京：ひつじ書房.
- Meyer, Gustav (1891). *Etymologisches Wörterbuch der albanesischen Sprache*. Straßburg: Karl J.Trübner.

Sasse, Hans J. (1991). *Arvanitika. Die albanischen Sprachreste in Griechenland*, Teil 1. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

**Zu den Funktionen der Verbalphrasen mit Präposition ndǵ/ndé
im Arvanitischen (Nordostattikoböotischen)**

IURA Ichiro

Dieser Aufsatz behandelt eine Eigentümlichkeit des Arvanitischen, d.h. der albanischen Sprachreste in Griechenland, insbesondere bei den Bildungen der Verbalphrasen im Nordostattikoböotischen (eine typisch arvanitische Mundart in dem Gebiet, das die Dörfer der Arvaniten im nordöstlichen Teil der Eparchia Attika umfaßt; NOAB) im Vergleich mit der albanischen Schriftsprache.

Bei arvanitischen Verbalphrasen mit der "schwachen" Dativform des Personalpronomens tritt oft die "starke" Form des Personalpronomens mit der Präposition **ndǵ/ndé**, die heute in der albanischen Schriftsprache nicht mehr vorkommt, an die Stelle des indirekten Objekts. In dieser Beziehung sind morphologische Formen des Mittelalters erhalten geblieben, bedingt durch die geographische und kulturelle Absonderung von Albanien.

Die neugriechische Syntax läßt einige Präpositionalgruppen als indirekte Objekte zu. Wahrscheinlich unter den sprachlichen Einflüssen des Neugriechischen könnten diese syntaktischen Abweichungen von der albanischen Schriftsprache nicht nur bei den Pronominalgruppen sondern auch bei allen anderen Nominalgruppen als indirekte Objekte entstanden sein (allerdings wird die Dativform des Nomens, im ganzen genommen, häufiger benutzt).

In der albanischen Schriftsprache ist der Dativ zur Anzeige des indirekten Objekts immer notwendig. Im Arvanitischen kann das Dativobjekt unter kontextueller Bedingung durch die Präpositionalgruppe ersetzt werden.